

4. 栗づくり

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-10-03 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2297/46926

4. 栗づくり

大橋 美遥

1. はじめに
2. 栗づくりの概要
3. パイロット事業
4. 現在の栗づくり
5. 考察
6. おわりに

1. はじめに

今回調査を行った旧柳田村の上町地区では、栗をはじめブルーベリーや椎茸の栽培をされているお宅が数軒ある。その数は決して多くはないが、調査を行わせていただいているうちにそれらを栽培することの奥深さや楽しさ、大変さや面白さをたくさん教えてもらった。どれもが初めて知ることばかりで大変興味深いものであった。本章ではその中でも盛んに栽培されるようになったきっかけとして大きな歴史的所以がある「栗づくり」について、その変遷から栽培の流れまで様々な側面からまとめたい。

2. 栗づくりの概要

はじめに述べたように、旧柳田村で栗づくりの栽培が盛んになったことには大きなきっかけがある。昭和時代の後半に行われたパイロット事業において大規模な農地開発がなされたことである（パイロット事業とは、試験的に先行して行う事業の意味を指す）。

表1は上町地区における経営耕地面積の推移である。これを見ると1960年から1970年にかけて樹園地の面積が一気に増加し、75年までにそのさらに3倍以上の広さまで拡大していることが分かる。パイロット事業で新たに開拓された土地、とくに栗園や栗栽培に関する土地の面積に関しては樹園地の項目に加算されており、その数字を見るとパイロット事業がいかに大規模なものであったか想像できる。また一方で注目すべきはその減少の仕方、1980年代後半から先ほどの急増の逆をたどるように急激に小さくなっている点である。一度開発がなされたにもかかわらず樹園地として含まれなくなった土地はどうなったのだろうか。同じ時期における田畑の面積が全く増加していないことから転用にまわされた可能性のある土地は一部にとどまり、多くの土地が耕作放棄地となってしまったことが推測できる。この様子から考えてもパイロット事業は大成功とは言えない結果に終わったのではないだろうか。

そしてこのパイロット事業で多く生産されたのが栗である。栗の生産量についても見てみたい。

表 1：上町地区 経営耕地面積（単位：a）

	計	田	畑	樹園地
1960年	19,348	17,753	1,617	3
1970年	19,440	16,880	1,260	1,310
1975年	20,271	14,710	884	4,677
1980年	19,181	14,392	917	3,872
1985年	18,609	14,299	900	3,390
1990年	15,809	13,589	873	1,347
1995年	13,786	12,314	751	721
2000年	13,680	11,564	864	1,252
2005年	9,991	8,771	552	668
2010年	11,005	9,942	584	479

（出所：農業センサスより筆者作成）

表 2：柳田村における農地開発地区の栗生産量の推移（単位：t）

	1970年	1973年	1975年	1978年	1980年	1983年
柳田村	-	6.4	15.6	65.0	40.8	71.0
能登北部全体	8.1（販売量）	107.0	241.7	578.5	316.0	361.0

（出所：『石川県の農林産物とむら』1985：136）

表 2 を見ると分かるように、柳田村においても能登北部全体（輪島市、珠洲市、穴水町、能都町、門前町、柳田村）においてもパイロット事業の展開に沿って栗生産量も変化しており、1970年代にピークを迎えその後は大幅に生産量が減少している。ただし1983年には村も全体も増加しているの少し挽回しているようだが、その後も減少傾向は続いたと思われる。

こうして45年ほど前に政策的な背景のもと柳田村に多くの栗農家が生まれ、栗づくりが活性化の一端を担い、そして様々な要因によって衰退していった。一方で今でもその栽培を続けておられる農家のお宅も数軒あり、現在は県規模や他地域と合同での栗の地域組織も存在するなど、規模はかつてに比べ小さくなったが安定した栗づくりが行われている。

3. パイロット事業

まずパイロット事業というものが一体どのような取り組みであったのか詳しく見ていきたい。

パイロット事業、正式には国営農地開発と栗の関わりは昭和20年代の後半から30

年代の初頭にさかのぼる。113,000 ha という広大な能登北部地域でありながら、その耕地率はわずか 12%で、他は雑木林など利用価値の低い林野が 77%と大半を占めていたこと。加えて地理条件が悪く、各種産業も零細で経済成長から取り残され、そのため人口の流出、過疎化現象が進展し、県南部の加賀地域との間に大きな経済的較差を生ずるようになったことがあげられる。

このような背景をふまえ、一方において、戦後の食糧増産、地域社会の開発、地方自治の確立を目標とした諸政策が模索され、各種の専門家による提案がなされた。中でも昭和 26 (1951) 年、国土総合開発法による能登特定開発地域の指定、昭和 27 (1952) 年から 28 (1953) 年にかけて言語学や社会学などの九学連合調査の成果をふまえ、市町村の政策の中では、農業面の開発を最優先として未開発林野のうち大規模な開発可能地で農地を造成し規模拡大による自立農家を育成するための国営開拓事業を積極的に推進する動きがみられた。

国営開拓事業の調査は昭和 33 (1958) 年から金沢農地事務局 (現北陸農政局) で行われ、この調査のため、北陸農政局では専門技術者の現地調査による意見を求め、果樹についての梶浦実の意見として、気象条件は海岸性気候で積雪深が少なく、果樹栽培地帯として優位な条件を持った地帯である。地形は想像よりおだやかな丘陵地帯が多く、山地帯といった感がなく、果樹園開発に適したものと思う。さらに頻度の強い斜面は、スギ、アテ等の有用林が分布し、緩い傾斜面及び頂上部は雑木、ササ等の植生を見るが、果樹栽培の点より中以上の地力を保持していると考えられる。したがって導入の可能性のある果樹は粗放栽培果樹、特に栗の適地として有望であり、そのほか、カキ、ウメ、アンズの適地でもあると述べている。

栗園の造成は昭和 41 (1966) 年から二子山地区 (穴水町、能都町) で行われ、続いて神野地区 (能都町、柳田村)、外浦北部地区 (門前町、輪島市)、輪島柳田地区 (輪島市、柳田村)、珠洲地区 (珠洲市) などの 5 地区で行われ、昭和 60 (1985) 年で総面積 1,419ha になっている。その内、実際に栗の栽植可能な土壌改良面積は 819ha にものぼり、農地造成面積の約 57%となっている。昭和 60 (1985) 年までの栗植栽面積は 801ha で約 700 戸の栗栽培農家が農地開発地区で栗栽培を行っているが初期に植栽した地区から一部で廃園も出はじめ、多くの問題を抱えながら進んでいた。

農地開発地で植栽されている栗の品種構成は丹沢 37%、筑波 36%、伊吹 15%、石鎚 10%、その他 2%となっており、栗生産用機械および施設は農業構造改善事業等、国及び県の補助事業によって計画的に整備されてきた。とくに集荷、選別及び出荷について経済農協連が運営する集荷選別施設が穴水町にあり、能登地域の一元的な共販を推進する上で大きな役割を果たした。

しかしながら、栗の収穫量は昭和 56 (1981) 年には 499t であったが、昭和 53 (1978) 年の 678t をピークに以後伸び悩んでいた (『石川の農林産物とむら』1985: 134-137)。

栗は、県の指導、農家の努力にもかかわらず、韓国産の輸入の増加により、安値に推

移し病虫害と共に逐次栽培が放棄され、昭和 60（1985）年頃より、カツラマルカイガラ虫の猛威により木が枯損し、全滅状態にまで追い込まれた（『むらを創る』1993:242）。

表 3：上町地区 農家数（単位：戸）

	1960	1970	1975	1980	1985	1990	1995	2000	2005	2010
総戸数	254	231	-	224	-	225	-	215	-	190
総農家数	246	216	193	190	178	165	155	156	106	87

（出所：農業センサスより筆者作成）

第 2 節で触れた表 1 の上町地区の経営耕地面積と表 2 の栗生産量推移に加えて、この表 3 の上町地区における農家数の変化を参考にしてみる。この数字は栗以外の農家の数も含まれているので栗農家そのものの数の推移はわからないが、やはり農家自体の数が減少をたどっている。おそらく栗農家も例外ではない。

では、当時パイロット事業を目の当たりにし、また一部ではあるが実際に栗づくりに取り組んでいた村民の方々はこの政策を現在どのように受け取っているのだろうか。

A さん（神和住、男性、61 歳）

パイロット事業は栗づくりをやっていた人が多かった印象であるが、失敗だと感じている。現在上町地区で栗栽培をやっているのは 5 軒ほどだ。

B さん（神和住、男性、73 歳）

昭和 55（1980）年頃に持ち山のうち 3～4 町（3～4ha、9,000～12,000 坪）を用いてパイロット事業に参加した。神和住と中斉を合わせて 80 戸中 21 戸が栗農家となっていた。栗のほかにもクワやカキを育てた。

C さん（寺分、男性、69 歳）

参加したのは昭和 40～45（1965～70）年頃。2 町 5 反（2.5ha、7,500 坪）ほど山を起こして栗を植えた。現在はやめてしまったが当時は 100 軒以上の家がパイロット事業で何かしら栽培をしていた。一方で負担金だけ払った状態で作付けしない人、一部には栗を植えたまま土地を他の人に貸している人もいた。

D さん（上町、男性、77 歳）

昭和 59（1984）年頃、パイロット事業として牧草地を購入。負担金は 1 千万円以上だった。役場でこの事業を担当していた人が友達だった。同年代の農家のうち 7 割が葉タバコ生産をしていた。やがてタバコが余るようになり生産調整するようになる。高齢の農家はそれをきっかけにその頃からみんな辞めてしまった。畑はどんどん荒地と化した。自分の栗栽培の期間は 30 年ほどで、面積は 1 町（1 ha、3,000 坪）。多い時は 10 t の生産で、石川県で 2 番目に大規模だったこともあった。

表から考察できるだけなく、当時の村民の方々の間でもパイロット事業は良い結果を残すものではなかったという認識で一致しているようである。

4. 現在の栗づくり

これまでに述べたような背景をふまえ、上町地区では今でも約 5 軒のお宅で栗づくりが継続されている。今回の調査ではそのうち B さんのお宅に伺い詳しくお話を聞かせていただいた。以下、B さんのお話を参考に現在の上町地区における栗づくりの実態と、さらには栽培の手順から手入れの仕方まで、栗づくりというものがどのように行われているのかについてまとめていく。

4.1 地域組織

上町地区の栗づくりを後ろから支えている地域組織として石川県くり生産振興会がある。平成 28 (2016) 年度現在で計 41 名の栗農家と JA 職員から構成されており、上町地区含む柳田村のほかにも穴水町や輪島市から約 30 名の栗農家が参加している。活動は月に一度ほど行われている。主に講習会が中心で夏期や冬期の栽培管理講習、むき栗出荷講習、剪定講習などその範囲は幅広い。B さんも本を読んで勉強する以外にこれらの講習会に参加することで知識を深めているとおっしゃっていた。

4.2 年間工程

栗の栽培は春分の日頃から活発に動き出す。3 月、良さそうな枝を選び 30cm 程度の長さに切り、濡れた新聞で包んでナイロン袋に入れ冷蔵庫に保管する。4 月下旬にそれらを接ぎ木する。この枝を選ぶときから接ぎ木するまでの期間は約 1 か月間が丁度よい。枝は水が欲しくて弱っている状態なので、接ぎ木され水分が与えられるとぐんぐん伸びる。とくに葉が 5~10 枚開いたときが一番水を吸い、一番成長する。風よけとして接ぎ木の部分には穴をあけたナイロンやペットボトルをかぶせておき、5 月下旬まで様子を見る。この間 B さんは毎日生長の様子を見に行くそうである。

表 4：栗づくりの年間工程

1 月	剪定	7 月	防虫
2 月	剪定、(下旬) 接ぎ穂、焼却	8 月	防虫
3 月		9 月	収穫
4 月	接ぎ木	10 月	収穫
5 月		11 月	(半ば頃) お礼肥、(下旬~) 苗植え
6 月		12 月	剪定 (~2 月頃まで) ↓

(出所：B さんへの聞き取りから筆者作成)

6月の初めになると白くて細長い花が咲き始める。剪定具合では雄花ばかりのこともあり、これでは果実が実らせるのが難しい。後ほど出てくる剪定という過程がとても重要であることが分かる。またBさんのように田んぼもやっている農家の方の場合、5～6月はそちらの方も忙しい時期に入るため、本当に大変だとおっしゃっていた。

7月から8月にかけて約10日おきに4回防虫剤をまき、防虫対策を行う。同時にイノシシも栗を狙って畑にやってくるので、電気柵でイノシシにも対抗できる体制をつくる（これらの外敵対策については後ほど詳しく述べる）。

9月になると収穫時期の早い品種から徐々に実りの時期を迎え始め、いよいよ収穫が始まる。遅い品種でも10月中旬には実をつける。秋分の日を迎える頃になると栗の木は養分を吸わなくなる。そこまでくると収穫の時期が終わったということで11月の半ばにお礼肥という鶏糞をまき、豊作を感謝する。ここで落ち着くかと思いきやまだまだ栗の栽培はやらなければならないことがあり、11月の終わりから12月のはじめにかけて新しい苗を植え、その後12月から2月頃まで剪定という、樹木の枝を切り、養分が効率よく行き届くようにする作業を何度も行う。ここまでの工程を経てやっと栗栽培の1年がひと段落するのである。

4.3 栗の品種

栗の品種は政府の統計データに記載されているものだけでも40種類以上あり、収穫時期によって3つに分けられる。早生栗は8月下旬～9月下旬、中生栗は9月下旬～10月中旬、晩生栗は10月上旬～10月下旬に収穫できるとされている。このうちBさんのお宅で育てられている栗は5種類で、収穫時期は以下のようなものである。

9月初め ... 丹沢、ぼろたん、伊吹、紫峰

10月初め ... 石鎚

丹沢、伊吹、石鎚はメジャーな品種でパイロット事業によって造成された栗園でもそれらに加えて筑波が主に植栽された。なお石川県内での品種構成割合をみると、概ね、丹沢40%、伊吹20%、筑波20%、石鎚20%となっている（『石川県の農林産物とむら』1985年）。

栗には表面の固い皮部分である鬼皮と、実に密着している薄い皮部分である渋皮がある。本来の日本種の栗は渋皮がむきにくく調理に手間がかかるというのが特徴だが、この難点を解決すべく農研機構が作り出したのがぼろたんという新しい品種であり、これは純日本種でありながら加熱することによりぼろっと鬼皮と一緒に渋皮が剥ける画期的な栗といわれている。ただしぼろたんはその味も美味しい一方で病気に弱く肥料も必要とされるので栽培には手間がかかる。

紫峰という品種は害虫のクリタマバチにとっても強いうえに樹勢も強く豊産性で、とても育てやすい品種である。

4.4 外敵対策

栗栽培にはイノシシと害虫の駆除が欠かせず、栗農家の方はこの点に関しても念入りに対策を施して栗を守っている。4.2でも述べたように夏は樹木への害虫の侵入が多いので何度も殺虫を行う。主にクリシギゾウムシ、モモノゴマダラノメイガ、クリタマバチ、ドウガネムシといった害虫が日の当たらない根元から入り込み穴をあけて進んでいき、卵を産んで樹木の中を食い荒らす。そこでアルミの針金で根本を突き、エルサンの原液を油さしで注ぎ込んで殺虫する。

収穫時期になると今度はイノシシが実を狙ってやってくるが、これに対しては1秒間隔で6,500ボルトの電流が流れる電気柵を二段にわたって畑を囲うように設置し侵入そのものできないように対抗する。電気柵を二段にすることはイノシシが飛び越えて侵入してくるのを阻止するだけでなく、子イノシシが20cm、親イノシシが40cmという親子どちらの体の大きさにも対応できるようになっている。

4.5 出荷

むき栗は1kgずつナイロンに入れ、大匙1杯の塩と水を入れる。それを発泡スチロールに入れて3~4つずつ農協に出荷する。皮をむく作業は1時間半~2時間かかる。

5. 考察

ここまで今と昔の旧柳田村における栗づくりについて見てきたが、それまで自発的に栗の栽培をしていた農家はほとんどいなかったこの村でパイロット事業の展開によって山が開かれ栗農家が一気に増加したことは、この村における栗づくりの歴史を辿るにあたって重要な出来事として外せないように思う。そして念入りな下調べや検討がなされ、行政による熱心な指導等も施されたにもかかわらず数年のうちに多くの樹木が枯れ、栗農家も減少し、パイロット事業がいわば失敗という結果に終わってしまったのは、第3節でも触れたように当時想定していただだけでは行き届かない問題が多く発生し、またそれ以上に当時の栗農家の方々が想像していた以上に栗の栽培というものが大変で手間のかかるものであったためであろうと考える。

それだけ栗の栽培が簡単なものではないということは、現在の栗づくりを様々な観点から見つめてみることによっていっそう痛感したが、それではBさんを初めとして現在も栗づくりを行っている方々はなぜ続けるという選択肢を今日まで選んできたのだろうか。Bさんにお話を聞く中で、例えば栗ではなく米農家として生計を立てていくことを考えるとしたら、米作りはトラクターやコンバインといった機械を必要とする。それを用意するだけでも2百万円以上かかるのだからその元を取ろうとすると収入どころではなくすればするほど赤字なのだ、とおっしゃっていた部分があったのだが、まさにそのような効率のことや費用的な部分というのも一つの背景として挙げられるのではないかと感じた。

Bさんは、栗づくりは大変ではあるけれどやりがいや達成感は大きく、仕事である一方趣味のようでもある、ともおっしゃっていた。手間暇をかけるからこそ得られる心満たす感情のパワーが、次第に愛着へと繋がり、今となっては生活の一環にさえ溶け込んでいるのだということを強く教えていただいた気がする。

6. おわりに

栗の栽培は一年の間にさまざまな工程を必要としており、それはまさに根気との勝負と言える。栗の種類によって収穫の時期も違えば除草剤は年に数回にわたってまかなければならないし、なにより外敵も多く駆除が大変である。そうであるからこそ栗づくりは大変奥深く、そしてとても興味深い。この調査実習を通してそういった栗の魅力、さらには上町地区の様々なすがたを知ることができ、貴重な経験をさせていただいたことをとてもありがたく思う。現在、上町地区における栗農家は数少なくなっており、後継ぎもなかなかいないのが現状である。栗栽培は最初こそ国の政策として始まったかもしれないが、今後は栗栽培をやりたいと進んで手を挙げる人物がどんどん現れ、この地区における栗とのつながりが絶たれることなく後世へ引き継がれていくようになることを願わずにはいられない。